
仮面ライダーテイル～LEGEND OF FAIRY TALE～

月光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーテイル〜LEGEND OF FAIRY TALE
E〜

【Nコード】

N84150

【作者名】

月光

【あらすじ】

昔々のお伽噺が、現代に怪物＞ドール＜として蘇る…
これに立ち向かう、謎の青年＞古谷 恭介＜。

彼は＞仮面ライダーテイル＜として、＞ドール＜と戦う。

この青年は何者なのか？

このお伽噺事件の意味とは…？

STORY／ネコは長靴を履く（前書き）

これは、モバゲータウンにおいて執筆中の「仮面ライダーテイル」を、一部内容を変更したものです。

この作品を通して、皆様に私の伝えたいことを汲み取ってもらえれば幸いです。

STORY／ネコは長靴を履く

現代から遡ること遙か昔：人々はお伽噺を綴った。

しかし、そんなお伽噺の存在意義も薄れつつある現代、20XX年

――
世間では、都市伝説として「お伽噺の怪物が出る」という謎の話題が飛び交っていた：

この都市伝説が噂され始めたと同時に、人には為し得ない怪事件が頻発するようになった。

これに対抗するべく、警視庁は内密にその怪物を>物語の化身<フエアリードール、通称>ドール<と名付け、対策本部を設置したのだった。

――東京都 東條高校

この高校は、ごく一般的なレベルの高校で、人数もそこそこ多い。ここに通う、幼馴染みの4人グループがいる。

白咲 綾、鈴木 愛、金田 剛、中津川 翔太だ。

腐れ縁で、小学校から高校まで奇跡的に同じ学校に通っている。

綾「おはよー!!」

翔太「おはよー♪」

剛「おう、今日なんか来るの遅いんとちゃうか？」

愛「寝坊しちゃって？」

翔太「いつものことじゃん…」

そんな会話を交わしていると、クラスの担任である新垣 美和子が教室のドアを開けた。

廊下には、見慣れない一人の男子生徒が立っていた。

「起立、気をつけー、礼!!」

新垣「さて、朝のH・Rを始めます。今日は大事なお知らせがあります。さ、入って」

教室のドアが開き、先程の男子生徒が入ってきた。
新垣は生徒に、黒板に名前を書くように促す。

「今日転入してきた古谷 恭介君です、仲良くしてあげてください。」

恭介「古谷 恭介です、宜しくお願いします」

「綾!!古谷くん、めっちゃかつこよくない!?!」

「うーん…」

「席は…白咲さんの隣に、取り敢えず座ってください。では、これで朝のH・Rを終わります」

その後の休み時間。

「白咲さん…だっけ?あのさあ、俺、この学校のこと、まだよくわかんないんだよね…よかったら案内してもらいたいんだけどな」

「ああ…それなら、私ちよつと用事があるから、愛に案内してもら

って…。」

「うそ！？いいの！？じゃあ恭介君、行こう♪」

「いってらっしゃーい…」

（古谷恭介、か…なんか苦手かも…）

休み時間というものの、恭介はひたすら質問攻めにあっていた。

そして、あつという間に放課後がやって来た。

「愛、今日一緒に帰らない？」

「ごめん綾、今日美化委員の仕事があつてさ…」

「なら仕方ないね…じゃあ、委員会頑張つてね」

「あ、そういえば…綾の帰り道って、確か例の”狼人間”が出たつてとこだよね…」

「え？愛、そんな都市伝説信じてるの？そんなの、ただの噂だつて！あ、委員会遅れちゃうよ！」

「わっもうこんな時間！？じゃあね…！」

綾は、1人家路についた。このとき、綾は愛の話を全く気にも留めていなかった…

しばらく大通りを歩くと、細い路地に入る。

今日はどうやら満月のようだ、薄暗い空に綺麗に輝く月が浮かんでいる。

「はあ…やっぱこの路地、暗いなあ…こんな暗さで人見たら、それこそ狼人間と見間違うかも…！！！」

その時…背後を追ってくる人影に気付いた。

（もしかして…ストーカー！？そんなだったらぶちのめしてやる…フフ）

実は綾は合気道を習っていて、ちょっとしたストーカー程度なら倒せる自信があった。

男「ねえ君いゝちょっとおにーさんと遊ばない？」

（やっぱりストーカー！！！）

このとき、綾は余裕の勝利を確信していた。

「そーですか、私は遠慮します！！！」

素早い動きで男の背後を取り、そのまま押さえ込む。

「痛たたたた！！ちょっと君い、いきなりこれは酷いんじゃないの？俺、怒っちゃうよ？」

「私を追っかけてきていて、よくそんなこと…！」

「ムカついたから、お前：一口な」

「え…？何言って…」

「てめえを丸飲みしてやるってんだよオ！！この狼がなァ！！」

「キャッ！？」

綾が押さえ込んでいた男は、みるみるうちにその姿を変え、狼を彷彿とさせる姿のドールに変化した。

「お…”狼人間”！？」

ドール『俺の誘いを蹴った罪はでかいぞ…てめえ、狼に一飲みにされたことあるか？』

「そんなの…>赤ずきん<じゃあるまいし…」

『なんだ、俺のハナシを知ってんのか…光栄だねえ、まあ有名だしな』

「な…何なの…！？」

恐怖で綾は後退りする。

『怖がらなくてもいいぜ？すぐ楽になる…少ししゃべりすぎたな、そろそろお食事といきますか…』

満月の下で、獲物を丸飲みにしようと狼が舌を出している。

そして、綾に牙を向ける。

『さあ、死ねエ!!』

(殺される!!)

ザシュッ!!

『ぐおああ!!?』

(え!?)

「こいつがドールか…怖エなア!!そら!」

謎の人影が何やら不完全な剣で狼人間を斬り上げた。

「ケガないか、白咲!!?」

「古谷君!!?なんで…!!危ない!!」
「がっ!!?」

綾を間一髪で助けた恭介だったが、腕に傷を負ってしまい、手に持っていた剣を落としてしまった。

その剣は、地面に落ちて、”しおり”になっていた。

「白咲!!! 下がってろよ!!!」

恭介はリュックから不思議な形をしたバックルを取りだし、腰につける。すると、恭介の腰にベルトが装着された。

バックルには、カードをスキャンできるような溝があった。そこに、これまたリュックに入っていた”本”に挟められた”しおり”をスキャンする。

そのしおりには、”ネコの絵”が描かれていた。

「変身!!!」

【CHANGIN' CAT】

バックルから音声の流れ、恭介の体は装甲に包まれていく。

そして、ネコを模した仮面を装着した姿に変わった。

テイル「へえ、これがテイルか! かけえ!!!」

『何!?! テイル!?! 何故封印が解かれて...』

「もう...何なの...」

綾は、目の前の光景が理解できずに気絶した。

「巻き込んで悪かったな、怖かったろ…ちょっと休んでてくれ」

『むぎむぎと殺されに來たかテイル！そのままその”力”は眠らせておけばよかったものを…』

「50年の眠りからベルトと共に復活したのはどのどいつだ？お前らこそ、そのまま封印されていればよかったろうに！！」

『いきなり50年の眠りから覚まされてなあ…俺達アちょうど退屈してたんだ、ちったあ楽しませろよ？』

「退屈か、可哀想になあ！またすぐにおねんねさせてやる…」

テイルは地面に落ちているしおりを手を持ち、剣にした。

すると、不完全だった剣は完全になり、刀身も約1.5倍になった。

「そうか、変身したら剣が強化されるんだな…」

剣に感心するテイルにドールの鋭い爪が迫る。

しかし、慌てること無く迫り来る爪を剣で受け止め、そのまま弾き返す。

その反動でドールは体勢を崩す。

テイルはその僅かな隙を見逃さなかった。

素早く体勢を立て直し、ドールの足を払うようにして剣を振るう。

そして、完全にバランスを失ったドールは地に伏した。

『ほう、楽しいねえ！』

「突っ伏してるくせに、調子のよろしいようで！」

起き上がる時間も与えずに、顔を目掛けて剣を降りおろす。

が、素早く顔をずらし剣を避けたドールは、起き上がり剣を握るテイルの右手に噛み付いた。

その力は凄まじく、また突然のことだったのでテイルは怯んだ。

そのまま一気に形勢逆転した。

「ツツテェ！！噛むのは反則だろ！？うおっ」

『ヒヒッ、今油断したろ？戦いにおいて”油断”は命取りだぜエ！！』

間髪入れずにテイルの右手を蹴り上げる。

剣は回転しながら宙を舞い、地面に突き刺さった。

『その剣がなけりゃあこっちのもんだ』

「オイ、俺をあんまりナメるなよ？寿命縮めるぞ」

激しい肉弾戦が始まる。

両者一步も譲らず、拳と拳がぶつかる。

しかし、徐々にドールが圧し始める。

テイルの装甲は、ドールの鋭い爪に傷をつけられ、白い煙を上げている。

『ハハア、勝負は見えたなあ！』

「おいおい、これが俺の本気だと思ってんのか？ 安心しな、今から”本気”を見せてやる」

そういつて、テイルは変身に使用した猫のしおり>キャットマーク<を取り出す。

そして、それをバックルの溝に再びスキャンする。

【MAXIM CAT】

バックルから「マキシマムキャット」の音声流れ、テイルの手に鋭い爪が装着された。

そして、ドールの視界から、消えた――

いや、高速移動するテイルの姿が、ドールの目では視認できないのだ。

高速移動するテイルは、手に装着した鋭い爪で、次々とドールを”引っ掻いて”ゆく。

「10秒だ！」

『ぐお…』

テイル・マキシمامキャットフォームは、10秒間手に鋭い爪を装着して高速移動できるフォームなのだ。

「さて、とどめを…」

『ウオオオオオン…』

突然の咆哮にテイルは怯み、思わず目を閉じた。

恐る恐る目を開くと、そこには身長が元の約2倍になったドールが…
いや、もはや狼を彷彿とさせる姿のドールではない、完全な狼となっていた。

「な、なんだ！？でかくなった！？」

『ガルアア！！フザケルナ、テイルウ！！俺ハ、マダヤラレネエ！
！ババアヤ赤ズキンナンカジャ、俺様ノ腹ハ満タサレネエンダヨオ
！！』

狼が力任せに爪でテイルを襲う。

「！！白咲が危ない！！」

徐々に圧され、テイルは綾がもたれ掛かっているブロック塀のすぐそばまで来ていた。

爪が気絶している綾に迫る。

『死ネ、人間!!』

「おおおお!!」

間一髪、回避することができた。
だが、ブロック塀は脆くも崩れ落ち、電柱までもが斬れ、倒れそうになっていた。

「オイオイ、マジかよ…がっ!？」

腹に重い一撃を喰らってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8415o/>

仮面ライダーテイル～LEGEND OF FAIRY TALE～

2011年1月7日13時19分発行